

資料紹介

## 井上円了関係書簡集（その二）

### 出野尚紀

*ideno naoki*

はじめに

本稿は、一九八六年三月に発行された『井上円了研究』第五号所収の「井上円了関係書簡集（その二）」（以下、「その二」）の続編である。「その二」に「表題に『その二』とつけたのは書簡の研究が未開拓の分野であり、今後も収集が期待される」（一）と記されているが、三十年以上の月日が経過して、ようやく幾つか井上円了（以下、円了）が発信した書簡を収集することができ、ここに発表する運びとなった。しかし、円了関係の収集済み書簡にはまだ発表されていないものが残されており、ひとまず現況を報告するものである。早急に収集済みの書簡を整理し、できれば更なる収集をして、「その三」として発表しなければならないと考える。

継続するものとして「その二」と同一の様式を取るべきであるが、凡例に記すとおり、翻刻をそのまま載せ、現代語意識を附するなど、「その二」から様式を変更した部分がある。

書簡の翻刻については、東洋大学文学部史学科教授・白川部達夫先生、ならびに、同ライフデザイン学部教授・三浦節夫先生の手を煩わせたので、ここに記して謝したい。

本書簡集では円了が記した書簡十通の翻刻を発表する。宛て先の内訳ならびに所蔵先は次のとおりである。石黒忠憲宛の書簡一通、品川弥二郎宛一通、関屋貞三郎宛一通、花房義質宛三通の計八通の書簡が国立国会図書館憲政資料室に、徳富蘇峰宛の書簡一通が徳富蘇峰記念館に、④重野安繹宛の書簡一通が東京都立中央図書館特別文庫室にそれぞれ所蔵されている。また、今回まだ翻刻が終了していないため発表できないものに、円了から森林太郎に宛てた書簡、高島平三郎、前田慧雲、渡辺董之介から円了に宛てた書簡一通ずつがあり、いずれも東京都立中央図書館特別文庫室に所蔵されている。

## 凡例

- 一、書簡を活字化するにあたり、以下の原則にしたがって翻刻し、通信文本文については理解のために仮に現代語意識をその後ろに附した。
- 一、書簡の配列順は受取人別、五十音順とした。
- 一、同一人の書簡の配列は、年月日順とした。推定年代は（ ）内に記したが、年代推定になお誤りがないとは言えない。
- 一、翻刻の改行は書簡の記述に従った。
- 一、本文中判読不能の箇所は□で示した。
- 一、翻刻の漢字は原意をそこなわない限り旧字体を新字体に改め、変体仮名・合字は普通の片仮名に直した。
- 一、本文中の明白な誤字、脱字等や説明のために挿入したものは下に「」で示した。
- 一、句読点は原文にほとんどないが、便宜上これを附した。

井上円了書簡

1 石黒忠憲宛書簡

(1) (明治四十年) 五月十六日(2)

(葉書表)

東京市牛込区

揚場町十七

石黒男爵殿

執事御中

豊後 升田町 客中

井上円了

(葉書裏)

肅啓

前週高千穂ニテ

呈書仕候、其後豊後ニ入

リ故広瀬中佐銅像除

幕式ニ参列、所感ヲツツリ

候義、叱正ヲ仰キ申候、  
軍神像成拳盛儀、是日  
晴風翻国旗、人埋林野満(カ)  
山里、奏樂声中幕正披、  
眉目如活使人想、悠悠含  
笑上船時、七生報国君自  
誓、誰疑千載護皇  
基ウル

井上円了拝

五月十六日

謹んで申し上げます。

先週、高千穂で手紙を差し出しました<sup>(3)</sup>。その後大分県に入り、戦死した広瀬中佐<sup>(4)</sup>の銅像除幕式に参列し、感想を綴りましたので、「以下の詩文の」添削をお願いしたく存じます。

軍神「広瀬中佐」の銅像が完成し、盛大な除幕式が行われている。この日は晴天で、国旗が風にはためいている。人が林野を埋め、山里に満ちている。音楽が演奏されるなか、まさに幕が開かれた。顔つきは生きているように思わせる。落ち着いた笑を含んで乗船のときに、七度生まれ変わっても国に尽くすことをあなたが自

らに誓ったことを誰が疑おうか、千年たっても天皇を中心とした日本国の基もとを守っていることを。

(2) (明治四十五年) 二月十一日(5)

(封上書)

保存もの

井上円了手紙

(本文)

肅啓、先日は精養

軒へ御臨場被下御歛

迎ヲ辱ウシ候段敬

謝(ノ)至ニ御座候、早速

拜趨御礼可申上ノ処、

目下紀行論述ニ着

手候ニ付、乍略儀以

寸紙御礼申上候、昨

年日本奇談発

行、右ハ茶話ノ笑材

ニ過ギザル戯著ニ有

之、清覽ヲ堪ヘスハ恐

縮ト存候ヘ共、別封ニテ

御座右ヘ拜呈仕候、帰

国ノ拙作併セテ供高覽申候、

背老<sup>(カ)</sup>四月上長途

看盡濠阿欧米都

帰勤家山冬未遍

只驚霜雪滿吾鬚

二月十一日 井上円了拜

男爵石黒先生閣下

謹んで申し上げます。

先日は上野精養軒にお出でいただき、歓迎をしていただきまして、感謝の至りでございます。直ぐにもまかり越しまして、お礼を申し上げますところですが、目下のところ、「今回の世界周遊旅行の」紀行本<sup>(5)</sup>の論述に着手しましたので、簡略いたしましたして、手紙でお礼を申し上げます。

昨年は『日本周遊奇談』(7)を発行しました、この本は茶飲み話の題材になる程度の戯れ本に過ぎませんので、ご高覧いただくものにないので恐縮とは存じますが、別封にてお手元に謹んでお贈りいたします。

帰国の際に作った拙作を合わせてご高覧いただきたく思います。

昨年四月に長期旅行に出た。オーストラリア、アジア、ヨーロッパ、南アメリカの町々を残らず観て、いそいそと故郷に帰ってみると山はまだ冬の装いを巡らしていない。ただし驚くべきことに私の髭が真っ白になっっている。

(3) 大正八年五月五日

(封上書)

牛込揚場町十七

石黒男爵殿執事御中

同郷人深井氏ヲ紹介

(井上円了印)

(本文)

謹啓御起居御伺奉参邸可仕候処、

一昨日静岡県下ヨリ帰京、直様本日ヨリ

支那へ向ケ出発仕ル都合ニテ、来月  
帰国マテ欠礼可仕候故、御海容可  
被下候、次ニ郷里来迎寺村字来迎寺出身  
新潟県友会員

深井子之吉

剣道柔道専一ニテ、門人も至テ  
多キ趣ニ候、詳細ハ別紙中ニ有  
之候、就テ男爵閣下ニ名譽贊  
助員帖ニ御記名ダケ願度、今  
朝本宅拙者ニ紹介ヲ懇望セラレ候  
ニ付、同村ノ廉ヲ以テ一書相添申候、  
委細ハ本人ヨリ拝陳可仕候、本日  
旅装多忙ノ際、乱筆御免被下度候  
大正八年五月五日朝

井上円了

拝

男爵石黒先生閣下

謹んで申し上げます。

ご在宅かお伺いを立てて参上するべきところですが、一昨日に静岡県から帰京し<sup>⑧</sup>、直ぐですが本日から中国に向かつて出発する都合になっていきますので、来月の帰国<sup>⑨</sup>まで欠礼することになってしまいます。広いお心もちで許していただきたく存じます。

次に郷里の来迎寺村字来迎寺出身（現新潟県長岡市来迎寺）の新潟県友会員深井子之吉氏<sup>⑩</sup>を「紹介します」。氏は剣道・柔道に長けていて、門人もとても多くいるとのこと。詳細は別紙のなかにあります。つきましては「石黒男爵閣下に名譽賛助員貼にご記名だけでもいただきたい」と、今朝、私の家で「先生を」紹介することを懇望していましたので、同じ村の出身という理由で、この書を添えさせていただきました。細かいことは本人から直接申し上げることと存じます。

本日は、旅の準備で忙しいところのため、筆が乱れていると存じますがお許しください。

## 2 品川弥二郎宛書簡

(1) 明治三十年九月十五日

(封上書)

九段坂上

品川子爵殿

執事御中 (井上円了印)

(本文)

謹啓 過日ハ得拝掲之榮雅有

敬謝之至ニ御座候、其節御話申上候

尾州人森田徳太郎本日上京

致候ニ付、本人へ一書相添為伺申候間、

拝謁之儀御許容被成下候ハ、

本人之大幸不過之候、右以

寸紙申上候也、 敬具

明治三十年九月十五日

井上円了拝

品川子爵殿閣下

謹んで申し上げます。先日は拝謁の誉れを賜りまして感謝の至りでございます。

そのときにお話し申し上げました尾張の人・森田徳太郎氏<sup>(1)</sup>が本日上京いたしましたので、本人にこの書を添えまして、お伺いを立てさせていただきました。拝謁をお許しただければ、本人にとっても大いに幸せなことで過ぎるものはないと存じます。

右の事柄をわざわざばかりの紙幅で申し上げます<sup>(2)</sup>。

3 重野安繹宛書簡

(1) 明治三十二年一月一日

(葉書裏)

謹奉賀新禧

昇邸之上賀儀可申上之処

地方旅行中ニ付不顧失礼

以手紙御祝辞申上候也

謹言

明治三十二年一月元旦

旅行先ニテ

井上円了

重埜先生

御執事

謹んで申し上げます。新年を奉賀いたします。

お宅に上がったうえで、お祝いの言葉を申すべきところですが、地方旅行中につき失礼を顧みず、手紙をもつて祝辞を申し上げます。

4 関屋貞三郎宛書簡

(1) 大正七年五月十三日

(封上書)

東京市外巢鴨池袋一一六六

関屋貞三郎殿

親展

(本文)

拝啓 向豊緑□ノ時下益〔々〕

御清祥奉賀上候、先程ハ総督

府ヨリ過分ノ御優待ニ接シ、

望外ノ御恩恵ヲ拝シ候□、

誠ニ是レ一身ノ光栄ト存シ、

衷心ヨリ敬謝スル所ニ御座候、

是レ全ク御厚配ノ余沢ト

存シ、先日旅行先ヨリ御請

書ト共ニ、謝状差上申候へ共、

此頃立柄氏ノ書信ニヨレハ  
既ニ東京ヘ向ケ御出発後ノ  
様ニ相見申候ニ付、此ニ以寸紙  
右御礼申上候、老生目下和歌  
山県熊野山中ニ出沒、毎日  
学殖<sup>(カ)</sup>ヲ穿チテ廻村巡講罷  
在、十九日新宮町開会ヲ以テ  
最終トシ、是ヨリ汽船ニテ名  
古屋ヲ経、二十一日(風波アレハ二十二日)  
中ニ帰京、二十四日朝ノ特急  
ニテ東京発、京城ヘ直行  
可仕候、滞京中ニ御自宅ヘ  
御伺申心得ニ候ヘ共、御外出  
中ナラハ難得拜晤候ニ付、此ニ  
以書面申上候、朝鮮各道ノ  
日割ハ予定表ヲ作り立柄  
氏ノ方ヘ郵送、訂正ヲ預置候、  
其様ニ御承知可被下候、

草々拝具

大正七年五月十三日

紀州串本町ニテ

井上円了

関屋局長殿

侍史

二小老生昨年末マテノ国民道

徳講演ノ略報告ハ本年ノ新

年状ニ相掲ケ候間、御参考ニ

備ヘ申候、別ニ哲学堂略案内

一葉相添申候間、池袋ヨリ距

離モ近ク有之候ニ付、御家族ト

共ニ御遊来被下度候

謹んで申し上げます。「木々の」緑も濃くなる時期ですが、益々ご清祥のこととお祝い奉ります。

先だつては「朝鮮」総督府<sup>13</sup>から過分のすばらしい待遇に接し、思いの外のお恵みをいただきました。誠にこ

のことは私の身には光栄なことと存じ、心の奥底から感謝するところでございます。

このことは本当に厚く手配りいただいた恩恵のたまものと存じ、先日旅行先から請書とともに感謝状を差し上げ申し上げましたところ、この頃立柄〔教俊〕氏〔註〕からの手紙によれば、既に東京に向かつてご出発なされた後のように考え申し上げましたので、ここに手紙をもって右のお礼を申し上げます。

私は目下和歌山県熊野の山中に出没し、毎日学び蓄えたことを掘り出して、村を巡っての巡講をしております。十九日の新宮町での講演会をもって最終として、そこから汽船に乗って名古屋を経由して、二十一日（風波が荒れれば二十二日）のうちに帰京し、二十四日朝の特別急行列車で東京駅を出発し、京城に直行いたします。

東京滞在中にご自宅にお伺い申し上げるべきところですが、ご外出中ならばご面会いただくことも難しいですから、ここに書面をもって申し上げます。

朝鮮各道の日割りは予定表を作つて立柄氏のところに郵送し、訂正を預かり、「手元に」留めます。そのようにご承知下さりませ。

意を尽くしておりますが、以上のように申し上げます。

大正七年五月十三日

紀州串本町にて

井上円了

関屋局長殿

侍史

私の昨年までの国民道徳講演の簡単な報告は、本年の年賀状に載せましたので、ご参考までにそろえました。別に哲学堂略案内を一枚添えましたので、池袋からの距離も近いところですから、ご家族とご一緒にお遊びにお越し頂ければ幸いです。

5 徳富猪一郎（蘇峰）宛書簡

(1) 五月二十五日<sup>15</sup>

(本文)

徳富猪一郎殿

紹介 井上円了

拝啓 其突然申出ニ候へ共、

哲学館内ニ漢学専修科

有之、其生徒之組織ニカゝル

漢学研究会ニテ是非

漢学ニ対スル御高見

承り而支那内地之実

況ニ付御高説ヲ拝聴仕度

熱望罷在候間、同会

幹事ニ一書相添御紹介

仕候ニ付御面会之上委細

御聴取可申上候、先ツハ

右御話迄ニ御座候也

井上円了 拝

五月廿五日

徳富猪一郎様

御侍史

今回突然の申し出ではございますが、哲学館のなかに漢学専修科という学科があり、その学生が作った組織であります漢学研究会で、ぜひとも漢学に対するご意見をお話いただき、中国国内の状況についてお話をお聞かせいただきたいと熱望しておりますので、同会の幹事にこの書を添えまして、「当人を」紹介したく、ご面会のうえで委細をお聞き取りいただきたく、まず右の文を記した次第です。

6 花房義質宛書簡

(1) (明治三十年) 六月十四日(16)

(封上書)

京橋区築地三丁目

花房義實殿 印(井上円了)

閣下御親剪

(本文)

謹啓、過日ハ辱拜謁之榮雅有

奉謝上候、早速哲学館來歴大略相認

御座右へ差上申候間、何分之御厚配

ヲ仰度奉願上候、哲学館ハ一種特

殊ノ学校ニシテ、他ニ類例無之事ハ

世間一般ニ承知仕候、即チ日本ニ於ケル

唯一ノ東洋専門校ニシテ、昨年以來

積年ノ目的タル漢学専修科開設

準備中、不幸ニモ祝融ノ災ニかかり、

器械書類等ニ至ル迄、悉皆焼失致候も、

其原因今以不相分、実ニ不審千萬ニ

御座候、

衆説ニハ迷信家ノ枚〔放〕火ナリト申居候、

兎ニ角不時ニ右様ノ悲境ニ陥り候

次第、御憐察ヲ賜り御奨励ノ

御恩命ヲ拝シ度与、希万望ニ至

御座候

草々敬具

六月十四日

井上円了拝

花房男爵閣下

謹んで申し上げます。先日は拝謁の誉れを賜りまして感謝の至りでございます。

早速哲学館のおおよその来歴を認め、ご身辺まで差し上げますので、どうか厚く手配りいただきますように仰せいただきたくお願い申し上げます。哲学館はある意味特別な学校で、他の学校に類例がない〔学校である〕ことは、世間一般の人々でも知っていることでございます。すなわち日本において唯一の東洋の学問を専門に学ぶことができる学校で、昨年から長い間目的としていた漢学専修科を開設する準備をしていましたところ、不幸にも火災に遭い、諸道具や書類などに至るまで、ことごとく全て焼損してしまい、さらに、その〔火災の〕原因は今もってまだ分かりません。実に不審な点が多くございます。多くの人が言うことには「迷信を信じる人が放火したのである」などと申されています。

とにかく思いがけず右のような悲惨な状況に陥りました事情に、お哀れみの思いをいただき、高く評価しての御恩命をいただきたく、望みは強い願いにとどくほどでございます。意を尽くしておりませんが、以上のように申し上げます。

(2) 明治三十年八月四日

(封上書)

東京市築地三丁目

花房義實殿□□□

□□□ニテ

井上円了

(本文)

謹啓、本年ハ殊ノ外大暑之処、

閣下益御多祥被為遊御起居

大慶此事ニ御座候、拙者哲学館

新築費募集之為メ、終年

東奔西走罷在、本年暑中ハ

佐渡ニテ消炎仕、毎度不在勝ニ候故、

久ク御疎遠ニ打過、多罪御海

容被下度奉祈候

右暑中御見舞迄ニ御座候也

敬具

明治卅年八月四日

哲学館主 井上円了拜

花房男爵閣下

謹んで申し上げます。今年はこのほか暑いところですが、閣下におかれましてはさらに幸いが多くお過ごしなされているとのこと、大いなる喜びとはこのことでございます。

私は哲学館の新築費用を募集するため、一年中東奔西走しております。

今年の暑中は佐渡で避暑(1)をしておりますので、いつものことですが不在にしがちですから、長いこと疎遠にしましており、申し訳なくも広い心で容れくだされるよう祈っております。

右は暑中見舞い〔に参上する〕代わりでございます。

以上のように申し上げます。

(3) 明治三十年八月二十六日

(封上書)

京橋区築地三丁目 小石川通町

花房義質殿 哲学館内

井上円了

閣下御親剪

(本文)

肅啓、残炎未収之時下、益御多幸被為在奉恭

賀候、先報煩御厚配候御賜金ノ一条、昨日

宮内省ヨリ御沙汰ヲ蒙リ、誠ニ 天恩ノ優渥ナル

感泣ノ外無之候、早速拝趨御礼可申上之処、家族中

病人有之候ニ付、不取敢以寸紙御礼申陳候、余ハ近日参邸

之上可申上候也

明治廿年八月二十六日 井上円了拝

花房男爵閣下

謹んで申し上げます。

暑さの残りもいまだ収まらない時期ではございますが、さらに幸が多くお過ごしなされたとのこと、お祝い申し上げます。

以前にお知らせしたことで、厚い手配お願いしたことから面倒をかけました恩賜金のことですが、昨日宮内省から知らせをいただき、本当に天皇陛下の温情には優しく手厚いことに感泣する以外にございません。早速ご面会いただいておりますので、家族のなかに病人がおりますので、とりあえずはこの手紙をもってお礼を申し上げます。

以上のこと以外は近いうちにお屋敷に参りまして申し上げようと存じます。

## 解題

石黒忠恵は、明治維新前後の時期に円了が最初に通った学問の師で、円了の死去の前には石黒の遺言執行人に指名される(18)など、円了の人生全体に大きくかわった人物である。今回収めた三通は、巡講の旅先から出したもの、世界周遊旅行の帰国歓迎会のお礼状、郷里の知人を紹介するものである。石黒と円了の間には、円了の大学時代にしばしば訪問していたり、哲学館の援助をしていたり(19)、旅先から土産を送ったりと(20)いう濃密な関係があったことが分かっているが、今回の書簡はそれらを補強するものである。また、三通目の深井子之吉を紹介する書簡は、その日付から円了が国内で発信した最後のものと思われる点と、その死が本人にも思いもかけないものであったことが分かり、貴重なものといえる。

重野安禪宛書簡は、いわゆる年賀状に相当する手紙であり、封筒は失われている。この明治三十二年は、重野が哲学館臨時講師を務めていた(21)ときであり、円了は、地方にいて直接新年の挨拶ができないときには、各講師

に年賀状を送っていたことが伺われる。

品川弥二郎宛書簡は、森田徳太郎を品川に紹介する添え状であり、石黒宛、徳富宛とならんで円了が知人を紹介するものである。円了が忙しいなか、そのような仲介をしていたことは今まで注目されていなかった。目新しい事跡といえる。品川は山県有朋と松下村塾で机を並べていた。妻の静子は哲学館賛成者のトップに名が挙がっている山県の姪で、養嗣子伊三郎の姉にあたる関係から円了との知己が結ばれたと考えられる<sup>22</sup>。

書簡の宛先の関屋貞三郎は、このとき朝鮮総督府の学務局長を務めていたので、この書簡を出した後、五月二十四日に自宅を出てから七月二十一日に帰宅する朝鮮巡講の事前挨拶として記されたものである。「御優待二接シ」とあるので、事前に現地での待遇などの事柄は説明を受けていたことが分かる。とくに普通車で移動するところが多かった円了が、朝鮮半島に渡る旅程でもっとも効率がよい列車とはいえ、特急に乗ることになっているのは、総督府の優待のひとつかもしれないが、注目に値すると考える。そして、国民道徳普及会会長として、現地で修身道徳に関する講演をするにあたり、大学を退隠した後にくらゐの場所で、何回、どれくらの聴衆に講演したかを印刷した新年挨拶を付している。この挨拶状には、大正四年十一月に加藤弘之が記した「護国愛理」の揮毫が絶筆として印刷されているので、円了から加藤に対する敬意と権威を利用しようという心の内が垣間見えるものである。また、哲学堂への言及が見えるが、この書簡を記す前に円了が開設した哲学堂が話に出ていると思われる。巢鴨町池袋という近隣に自宅を構えた関屋にどのようなところか紹介する「哲学堂略案内」のチラシをつけるという細やかな気遣いが見て取れる。

徳富蘇峰宛書簡は、漢学専修科の学生サークルの有志学生が徳富の講演を聞きたいと頼んできたので、円了が仲介したものである。円了が自校の学生のためにどれ程の気配りをしていたかが分かる資料である。さて、円了

は勝海舟を「精神上の師」と称して、哲学館三恩人のひとりと賞賛しているが、徳富も勝を師と尊崇し、『勝海舟伝』を記している。おそらくは、勝を間に挟む形で知己を得たと考えられる。また勝の生きている間の書簡であるという可能性があるので、円了と徳富の交友関係が勝を挟んで始まった傍証になるのではないだろうか。

花房義質は、外務省で外務卿副島種臣の部下であった経歴があり、この明治三十年頃は宮内次官を務めていた。哲学館は建築中の校舎が台風で倒壊した「風災」、隣接する中学校からの貫い火で全焼した「火災」、いわゆる哲学館事件の「人災」という三つの災いに直面したが、これらは、「火災」後の復旧に円了がどのような努力をしたかを示す書簡である。一通目では初めての面会の後に哲学館がいかにも有益な学校であり、恩賜金の下付を願うことを記しているが、二通目で新築費用の捻出のために駆けずり回っていることを記し、三通目で恩賜金を拝受できること決定した感謝を記している。

### 【註】

- (1) 東洋大学井上円了研究会第三部会編『井上円了研究』第五号、東洋大学、一九八六年、一〇一頁。
- (2) 発信年は、円了の大分県巡講における竹田市の講演年月日から推定した。
- (3) 円了は、「宮崎県紀行」によれば、明治四十年五月四日と五日に現在の宮崎県高千穂町で講演をし、六日まで滞在している。そのなかで石黒に手紙を出したようである。井上円了著、井上円了記念学術センター編『井上円了選集』第一二巻、東洋大学、一九九七年、三二八～三三〇頁を参照。
- (4) 日露戦争中に、旅順港で戦死した広瀬武夫（一八六八―一九〇四）のこと。円了は広瀬の出生地竹田に建てられた銅像の除幕式に参加しており、そのときの模様を広瀬の遺作を取り入れる形で七言律詩を詠んでいる。「大分県紀行」では、竹田の町の様子が主で、軍神の像が建てられていることを記すが、自分が除幕式に参加したことは記して

いない。前掲書、三四一頁を参照。

(5) 発信年は、円了の『日本周遊奇談』が明治四十四年（一九一一年）発行なので、その発行年から推定した。

(6) この第三回世界周遊の紀行本は『南半球五万哩』として、明治四十五年（一九一二年）三月十日に丙午出版から発行された。

(7) 前年の明治四十四年（一九一一年）七月に博文館から発行された。このときは外遊中だったので、まだ石黒のところに謹呈していなかったことを謝している。

(8) この静岡県巡講については、円了が次ぎの旅行先である大連で死去したため、手稿としても完成していないため、最後の講演地など未確定の部分がある。

(9) この言葉が実現することなく、円了は、六月五日に大連の西本願寺大連別院幼稚園での講演中に倒れ、翌六日午前二時四十分死去した。

(10) 深井子之吉は、明治四十四年（一九一一年）に帝国尚武館から十一月に『奥秘龍之巻』、十二月に『奥秘虎之巻』を出版した剣術家で柔術家である。

(11) 現在の愛知県江南市の人。真宗大谷派の門徒で、当時哲学館の特別館賓であった。後に東洋大学の評議員を務めた。品川も門徒であるということがこの紹介に関係するかもしれない。

(12) この円了の紹介文によって森田徳太郎が品川と面会できたかどうかは不明であるが、森田が持参した品川に宛てた書簡も同じく国立国会図書館憲政資料室に品川弥二郎関係文書として収められている。

(13) 関屋貞三郎もこの後に名前が出てくる立柄教俊も朝鮮総督府学務局に勤めていたことからの総督府かを補った。立柄教俊は、このとき朝鮮総督府の学務局に勤めていたが、その前に哲学館・東洋大学の教育学の講師を務めていた。そのため、朝鮮巡講にさいして、巡講の直接の担当ではなかったが、事前に手紙のやり取りをしていたのだろう。講師を務めていたことは、東洋大学井上円了記念学術センター編『東洋大学人名録役員・教職員戦前編』、東洋

大学井上円了記念学術センター、一九九六年、八五頁に記されている。

(15) 発信年は不明とした。徳富蘇峰から推定すると、以下の『蘇峰自伝』を参考に徳富が遼東半島を旅した年から明治二十八年以降であると分かる。そして、哲学館に漢学専修科の開講式が行われたのが明治三十年一月十日である。

よって、もっとも早い年は明治三十年である。また、明治三十二年九月に漢学専修科は教育学部となるので、このとき以前の差し出しといえる。校舎建築中であつた明治三十年の可能性は低い、この三年間のどの年とも決定す

る決め手がない。徳富蘇峰著『蘇峰自伝』、中央公論社、一九三五年、三〇六―三二一頁参照。

(16) 哲学館の駒込蓬萊町校舎焼失が明治二十九年(一八九六)十二月十三日なので、その翌年と推定した。

(17) 井上円了著、『井上円了選集』第二巻、五八七頁にこの年に佐渡の相川町、河原田町、両津町の三箇所で開催したという記録が記されている。

(18) 三輪政一編『井上円了先生』、東洋大学校友会、一九一八年、八九頁参照。

(19) 三浦節夫、出野尚紀編『東洋大学創立寄付者名簿』、東洋大学井上円了研究センター、二〇一七年、三七頁において、館賞と記されている。また、東洋大学井上円了記念学術センター編『東洋大学人名録 役員・教職員 戦前編』、一七頁によれば、明治三十八年(一九〇五年)四月より昭和十二年(一九三七年)まで哲学館大学・東洋大学の顧問を務めている。以上のような例が挙げられる。

(20) 三輪政一編『井上円了先生』、八八頁参照。

(21) 東洋大学井上円了記念学術センター編『東洋大学人名録 役員・教職員 戦前編』、六八頁によれば、重野は明治三十年から三十三年と三十六年に臨時講師を務め、三十八年四月から四十三年に亡くなるまで顧問を務めている。

(22) 品川の親族関係については、竹内正浩著『「家系図」と「お屋敷」で読み解く歴代総理大臣 明治・大正篇』、実業之日本社、二〇一七年、六二―六四頁による。